

ナイル増水期の祝祭と祈願式 —マムルーク朝期のカイロを中心に—

長谷部 史彦

マムルーク朝期(1250～1517年)のカイロは、中世後期のスンナ派イスラーム世界における盟主的国家の首都であり、統治正当性の源泉であるアッバース家カリフの居所であった。ミスル運河やナースィル運河が走り、大小の池が点在し、「穀物河岸(サーヒル・アル=ガッラ)」が賑わうこの「ナイルの都」はまた、紅海・インド洋経済圏と地中海経済圏を結ぶ遠隔地交易の幹道の中心に位置する人口30～50万人規模の巨大商都であった。マムルーク朝期に的を絞った本報告では、ナイルの増水期に政権都市カイロを舞台として催された祝祭や祈願式に注目し、その性格について社会史や政治文化史の視座から考察することにしたい。

巨大ダムによって水量が完全にコントロールされている現状と異なり、前近代のナイルは規則的かつ大規模な増減水を毎年繰り返していた。カイロのフスタート地区の対岸にあるローダ島の南端には、861年、アッバース朝のカリフ・ムタワッキルの命令でミクヤース(ナイロメーター)が建設され、以後この水位計測施設は「ハーシム家のミクヤース」と呼ばれた。この新しい施設の水位計測官には、従来のコプト教会キリスト教徒に代えてバスラ生まれのムスリムで伝承学者のアブー・アッ=ラッダードが任命された。以後マムルーク朝期に至るまで同家の出身者が計測官の職を独占し、「ナイルのカーディー(裁判官)」と称した。

ファーティマ朝期(969～1171年)には16ズィラーウ(1ズィラーウは約5.8cm)の「満水(ワフアー)」に到達するまで水位情報は公表されなかったが、マムルーク朝期にはカイロにおける増水開始期にあたるコプト暦第10月のパウーナ月26日(西暦7月3日)以降、「ナイルのカーディー」は毎日午後水位を測り、翌朝市内でその結果を触れ回った。ミクヤースを管理する計測官は、水位情報の公式発信者であった。なお、ピザンツ帝国期には聖ミカエルの日であるパウーナ月12日は「泥をはかる日」として知られ、増水を願って着飾った若い娘をナイルに投げ込む慣習があった。

コプト暦第12月のミスラー月(西暦8月)の「満

水」は翌春の冬作物(小麦、大麦、ソラマメなど)の収穫を約束する水位として特に重視され、課税の前提条件とされていた。そのため、スルターン政権はラクダの快速便を使って南のアスワーンにおける満水情報をいち早く手に入れた。カイロの住民(アーンマ)も増水開始期の「基準水位(カーイダ)」から「満水」へ、さらにコプト暦第1月のトゥート月(西暦9月)の「最高水位(サバート)」へと至る増水の過程を注視したが、この期間に水位の上昇が一時的に停止したり、減水したりすると、首都社会には不安と動揺が広がった。その機会をとらえて、穀物商人(ハッザーン、ジャッラーブ)やマムルーク朝支配層の一部は買占めや退蔵に走り、穀物価格は急騰した。消費者の不満はムフタスィブ(市場監督官)への投石やスルターンへの直訴などの食糧騒動となって現れたが、こうした民衆運動の発生を抑える意図もあって、スルターン権力は「異常」に即応して増水祈願式(イスティスカー)を積極的に主催した。そうした実践の前提をなしたのは、水位を自由に操っている唯一神に対して直接的に語りかけること、すなわちドゥアー(祈願)こそが「異常」の解消に必要であるという住民と支配層に共有された信念であった。

スルターン権力はミクヤースにスーフィー(行者)、サーリフ(聖者)、コーラン詠唱者を多数集めて住民参加の祈願式を組織した。1450年には、これに続けて断食の後、カイロ東部の砂漠の墓廟地区において大掛かりな増水祈願式が開催され、キリスト教徒やユダヤ教徒の住民もこれに加わった。こうした祈願式の主催と並んで、スルターンによる大規模なサダカ(自発的喜捨)もしばしば観察されたが、これも民衆運動を十分に意識しての施策であった。

マムルーク朝期を通じて満水祭(ジャブル・アン=ニール)は盛大に祝われ続けたが、そこでの中心的行事は、ファーティマ朝期の973年から続くミスル運河開きであった。ナイルとミスル運河を隔てる堰を切って「新しい水」を引き込むこの公式行事は、水利社会を統べるムスリム王が灌漑システムの管理維持という不可欠な行政責任を担う意志を表明する

場面であったとも言えよう。

ミスル運河開きに先立って、ミクヤースではスルターン、あるいはその代理人たる王子や政府高官によって「タフリーク（香りつけ）」の儀式も厳かに執り行われた。計測官が王から手渡されたサフランとバラ水でミクヤースの計測用井戸の内部を浄化するこの秘儀は、やはりファーティマ朝期の11世紀末頃から慣行化したものであった。当初それは同王朝の「神聖なるイマーム」とナイルの一体化を意味したとみられるが、シーア派の一分派イスマーイル派の王朝が創出した特異な儀礼をその後スナ派のアイユーブ朝、マムルーク朝のスルターン政権がそのまま踏襲したという事実は政治文化の継承という点で注目に値する。「香りつけ」が終わると、スルターンまたはその代理人は、マムルーク朝のシンボルカラーである黄色の垂れ幕が吊るされたミクヤースの窓から登場し、ナイルに浮かぶ「黄金舟（ザハビーヤ）」に乗り込むと、大観衆の見守るなかミスル運河の入口へと進み、前述の運河開きの行事を実施した。続いて首都のあちこちで陽気なお祭り騒ぎが繰り広げられたのである。

マムルーク朝の前期までは、コプト暦元日（西暦9月11日）の新年祭であるナウルーズ（ナイルーズ）も盛大に祝われていた。ナイルの水位が一年の最高点に到達しつつある時に行なわれるこの祝祭について、史料はいずれもその無軌道な性格を強調している。ファーティマ朝期には、スークや路上で道化による仮面劇（サマージャ）が上演され、人々は歌い、踊り、汚水やワインを掛け合った。アイユーブ朝期（1171～1250年）になると、皮革製品による頸部の叩き合いや卵の投げ合いも付け加わった。マムルーク朝期に入っても、こうしたナウルーズの活気は継続し、時には殺人事件まで発生したが、当局も例外的に大目に見たのである。

祭りのハイライトは、「ナウルーズ將軍（アミール・アン＝ナウルーズ）」の行進であった。庶民の選んだ「ナウルーズ將軍」は裸あるいは黄か赤の服を着て、顔に石灰か小麦粉を塗して毛皮の付け髭をし、ナツメヤシの葉で作った帽子を被り、庶民の乗り物であるちっぽけなロバに騎乗し、市内を行進する。彼は手に「ダフタル（帳簿）」を持ち、群集を率いて政府高官の館を巡回し、次々と「未払い金」を徴収する。このようにナウルーズの日には、日常的な政治秩序を転倒させた「さかさまの世界」が現出したのである。

エジプトのナウルーズはコプト教会キリスト教徒とイスラーム教徒が入り乱れてのカーニヴァル的祝祭であり、その起源をローマの農神祭サトゥルナリアに求める研究者もいる。しかし13世紀以降、一部のムスリム知識人や寛容さを失ったスナ派体制は、この宗派の壁を超えた陽気な祝祭への抑圧を徐々に強めてゆくことになる。モンゴル帝国や十字軍国家との対立や戦争を背景として高揚した聖戦意識やイスラーム純化運動は、内に対しては民間信仰や異教への干渉となってあらわれ、やがて古代遺跡やコプトの教会の破壊事件が頻発するようになった。ナウルーズの乱痴気騒ぎを「ビドア（正しい道からの逸脱）」と非難する一部ムスリム知識人の声を追い風として、1385年、後期マムルーク朝スルターン・バルクークはついに首都における開催を完全に禁止し、参加者の逮捕に踏み切った。しかし、同様の新年祭はその後も地方で残存し、とりわけ上エジプトでは少なくとも20世紀の初頭まで活気ある姿が保持されていた。

ナウルーズの禁止と同様に、「殉教者の祭り（イード・アッ＝シャヒード）」も14世紀にマムルーク朝政権による禁圧の対象となった。カイロの北の郊外にあるショブラー村でコプト暦第9月のバシヤンス月8日（西暦5月12日）行なわれるこの祭りは、「殉教者の指」の入った小箱をナイルに浸し、順調な増水を祈願するもので、イスラーム教徒も参加する重要なコプトの年中行事であった。マムルーク朝政権は1302年にこの祭りの開催を禁止した。スルトーンのナスィル・ムハンマドは1337年にその復活を許したが、1354年、当時の最有力軍司令官のサルギトミシュは自らショブラー村に行つて「殉教者の指」を奪うとこれを焼き捨て、この聖遺物が安置されていた教会を破壊したのである。

以上のように、首都においてナウルーズや「殉教者の祭り」が消滅していった14世紀は、ナイルの祝祭における転換期であったと言ってよいだろう。マムルーク朝はイスラーム以前から続くナイル増水期の祝祭を禁圧し、ミクヤースやミスル運河を中心的な舞台としたファーティマ朝以来のイスラーム国家の公式行事のみが浮き立つような宗教的環境を創り上げようとした。それは増水期の住民による多様な祈りの形態を統合し、一元化する「上からの」文化的強制であり、ナイルをめぐるカイロ住民の精神史においてもひとつの画期をなすできごとだったのである。

（はせべ ふみひこ 慶應義塾大学）